一話

関の十左門というもの、焚物なぐなってしまってよ、家のはりのんでけえとよ、腹ぐりしていだけんどせ、親方、そごさきれいな女きてよ。

「俺どご一晩泊めでくれ一

どって言うだけど、その親方というもの腹ぐりして、

「泊れ、泊れ」

というのだけど、一晩泊ったどごで八晩も泊ったけはぁ、十左門のカカアなってしまったけど。

山さ行ってきても、アバどごさ仕事させねではぁ、そばさおで、ちゃちゃと仕事して、あだってらみだいににょろにょろしているなんだけどせ、そのアバというものきれいなアバで、何さ行ぐと言ってもアバどごつれて歩くにゃ、あるどぎ、矢島の山さ栗取りに行ったそて、栗取に御籠背負って行って、アバこご痛どって御籠さよ、アバどご入れで、栗払って、

「アバ、こらこら、払ってきたんて」

って言ってアバさ、籠の中さ入れでおいだなさ栗まじえでおいだんどせ、アバはそれ番していたんど、していだんば、矢島の殿さまも山さ栗払いきんだど。

「あの籠なにだべ、行って見れ」

と言ったば、きれいだ女入っていだけどせ、して

「この女つれであんべ」

と言うだんけどせ、

「そのかわり、びんぼこどご忘れておげ」

びんぼこどご籠さ入れでよ

十左門のトドというものおもしろぐって、栗えっぺい払って、アバさきて、

「アバ、こら、栗もってきたよ」

と言ったば、その籠から

「メエー」

とびんぼこ出てきただけど、びっくりしてしまってはぁ、十左門のトドというものおもしろぐねぐって、〳〵家さきたんだけどせ、殿さまをもいい女と思うわげで、矢島の殿さま、カガアしておいだんだけど、なんぼおもしれごどしたたんて、なんとせ、そのカガアというもの泣いだんだけど、十左門恋しくって、してよ、何せばそのアバ喜ぶがど思って、何したもんだって喜ばねぐってよ、十左のトド、アバどご恋しくって、ホウロクというものを作えで、ホウロク売りに歩いて、町あたり、よその郡あたり行ぐもんだけどせ、そのホウロク売りというものよ、

矢島の下の柴山で

若い女を別にした、ホーローカイー

そしてよ、ずっと売りに歩いたんだけどせ、したけよ、今度ずっと行って、矢島さ行って、矢島の殿さまの家で、また、

矢島の下の柴山で……

と言ったば、矢島の殿さまのカガアが「ニッコ」と笑うだんけどせ、したばよ、殿さまよ、これだば俺、ホウロク売りなってアバどご喜ばせねばならねど思って、十左の家さ、ペロッとわさつけで、ホーさげで、して今度十左は殿さまさなって、殿さまの着物着せられで、そして、いでホウロク売のまねしたど、していだば、外がらおかっね係の者だきて、

「誰、それ、ホウロク売りのまねして、そういうふらちな事している」

とよ、殿さまによろ〳〵〳〵せよりできねぐって、十左が殿さまになってよ、殿さまがはぁ、そういうごどしたために、ホウロク売りにおどされでしまったど。

とっぴんからりんさんしょうのみ、技豆はちけでぴょんこ〳〵。